パセリの気持ち。

奥山メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パセリの気持ち。

【Ｎコード】
Ｎ６５２２Ｊ

【作者名】
奥山メイ

【あらすじ】
東京。失恋したばかりの彼女は、彼が部屋に残していったパセリの苗を、どうしても捨てられない。そんな時、新しい恋が始まって…

『つぶやき』だけで展開していく、ちいさな恋物語。切なくて甘い、そんな想いをパセリに乗せて。

予感

今夜は雪だ、と
ブラウン管の向こうで
見知らぬひとが告げた

カーテンを開けてみると　既にそこには灰色の空

泣き出しそうな風の震え

微かな電線の揺れ

それは
雪が降る前の
ざわめき…。

窓ガラス越しの眼下
街に人は溢れて
だけど皆無口で
襟を立てたまま
通り過ぎてゆく
足音すら立てずに…。

あなたが居ないのに
どうしたら
雪を迎えられるの？
こんな寂しい場所で…

あなたがいなくなって
もう季節が一巡りした

今ごろ誰と居ますか
雪のニュースに
子供みたいにはしゃいでますか

このコンクリートの街で
まだ暮らしてますか

…「友達になろう」って言ったのに

何の連絡もくれないから　きっと
あれは嘘だったんだね
優しい嘘

だけどね
嘘なんか要らないよ
キッパリけじめはつけたかったの

まだ信じてるよ
あなたが友達だって
恋人には戻れなくても
友達だって

だからバルコニーの
あなたが植えた
パセリの苗にも
水をやって
プランターも替えて
待っているの
また笑いあえる日を…。

――今夜は雪だ、と
ブラウン管の向こうで
見知らぬひとが告げた

雪はまだ
空にぶらさがっていて
今にも泣きだしそうに
あたしを見てる…。

雪のひとひら

雪、ちょっとだけど
積もったね

こんな都会で
粉雪が舞うなんて
久しぶりだよね

灰色の
コンクリートだらけの
街だから

…雪の白さが
眩しかったよ

明日には
溶けちゃうんだって
思ったら

…ちょっと寂しい
気もしたよ…。

――あなたは
ふるさとに居た頃
雪が大嫌いだったよね

「寒い寒い」って
子猫みたいに
炬燵の下に潜ってた

北九州の雪は
冷たくて
水っぽくて
あたし達を凍えさせたね

だからあなたは
東京に来たとき
すごく嬉しがったね

…「雪が降らない！」
って

だけど

雪が降ったら
あなたが一番
喜んでたね

本当は
ふるさとが
大好きだったんだね…

東京の雪は
ひらひらしていて
やわらかくて

でも
涙で熱くなった頬には
ちょっと冷たい…

ねえ
あたためてよ
あなたの掌で

ねえ
溶かしてよ
あなたの言の葉で

あたしは
この街で
凍えそうだよ…。

この
雪のひとひらを

あなたもどこかで
見ているのかしら

氷と恋

雪が止んだから
街に出てみた

お気に入りの
さくら色した
パンプス履いて

…道の脇に
残った雪は

黒ずんで
溶けかかっていて

何だかとても
悲しかったよ

あんなに綺麗だったのに
あんなにキラキラしてた
のに

残酷なほど儚い…。

あなたとあたしの
関係みたいで
ちょっぴり泣いた

ぼうっとしてたら
氷に滑った

そしたら誰かが
支えてくれた

あなたかと思った

でも違っていた

背の高い男の人

「大丈夫？」って
言ってくれたよ

うれしかったよ

優しい言葉は
久しぶりで
あなた以来で
うれしかったよ…

お気に入りの
ヒールが折れた

運命みたいに
折れてしまった

「大丈夫？」って
その人は聞いた
「家まで
送ってあげようか？」
って

うれしかったの
その優しさが
あなた以来の
その優しさが

だからあたしは
うなずいたの

その男の人に
惹かれていたの…。

とまと

あたしを助けた
人の名前は

志摩さん、っていった

びっくりしたよ
あなたと同じ名前

これって、運命なのかな

志摩さんは
奥さんに死なれて3年
1人で二人の子供を
育ててる

決して裕福じゃなくて
決して楽をしてなくて

でも
だからこそ

あたしのことを
見つけてくれたのかもね

この
広い広い
ガラスの都会で

彼は
すっごくお料理上手で

あたしの家に来るたび
ナポリタンを
作ってくれる

ちょっぴり甘くて
ちょっぴり酸っぱい
トマト味

志摩さんの奥さんが
好きだった
そんな味。

とっても美味しい
彼の味。

なんだか心が
溶けていく味…。

でもね
あたし怒ったの

志摩さんったら
勝手にあなたの
パセリを摘もうと
してたんだもの

あたし
怒ったの

理由は言わなかったけど

だって

あなたが
戻ってくるかも
しれないでしょ…？

だからね
今日のナポリタンも

トマトと野菜の
ハーモニー

そこに
パセリの影は見えない

アリストテレスの恋

彼は
とっても不思議なひと

だってね
自分のことを
『アリストテレス』って
呼んでほしいんだって

『なんで？』
って聞いたら

『なんとなく』だって。

でもね
本当はちゃんと
理由があるんだと思う

彼は
哲学が大好きで
アリストテレスの文献も

沢山持ち歩いてるから。

どうしてなのかは
わからないけど

何となく彼に
興味が湧いた。

もしかしたら
彼の亡くなった奥さんが
アリストテレスに
恋してたのかしら

…まさか、ね。

ねぇ

私、
彼にとっての
『アリストテレス』に
なれると思う？

彼にとっての
『哲学』的な存在に
なれると思う？

あなたはこんな時
笑うだけで
きっと
答えてくれないよね…。

わかっていても
聞いてしまうの

どこか遠くにいる
あなたに。

メリーゴーランド

今日は
アリストテレスと
遊園地に来たの

不景気だからか
人はすごく少なくて
風船売りのおじさんも
そこはかとなく
寂しげで

影だけが
地面に黒く焼き付いた

アリストテレスは
ジェットコースターが
大の苦手で

坂を下るとき
ぎゅうってあたしに
しがみついた

普通
しがみつくのは
女の子の方なのにね

でも
その瞬間

あたしの心臓が

トキンと鳴った…

ジェットコースターが

怖いからじゃないよ
嬉しかったからだよ

だって
あなたが去ってから
ずっと

誰もあたしを
抱き締めては
くれなかったから…

サーカスを見て
コーヒーカップに乗って

そんな間に
時は巡って

あたし達の影も
長く伸びて

闇の中に
メリーゴーランドの光が
華やかに
浮かび上がった

アリストテレスは
白馬に乗って

かぼちゃの馬車に
あたしが乗って

いざ
シンデレラのお城へ！

キラキラ瞬く
イルミネーション

ワクワクさせる
レトロな音楽

白馬の身体が
上下にゆれて

アリストテレスが
あたしに微笑む

馬車は巡る
どこまでも回る

回り続ける

そしてあたしは
アリストテレスに

微笑み返す…。

告白

メリーゴーランドから
降りた途端に

アリストテレスは
あたしを見つめて

あたしの背中に
そっと腕を回して

『帰りたくない』
って言ったの

あたしは
どう返事したら良いか
わからなくて

でも
アリストテレスと
一緒にいるのが
すごく楽しかったから

『私も帰りたくない』
って言ったの

そしたら
アリストテレスは
にっこり笑って

メリーゴーランドを
目の前にして

あたしのことを
抱き上げたの

まるで

王子様と
シンデレラみたいに

あたしが真っ赤になって
見つめ返すと

アリストテレスは
甘い視線で
あたしを刺した

あなたとは違う
大人の眼だった

そして
彼の顔が
近づいてきて…

あたしの唇は
あったかくて
やわらかいモノに
包み込まれた

やさしい
やさしい
キス

嬉しくて
嬉しくて

破裂しちゃいそうだった

キスしたのは
あなたと別れて以来
だったから

アリストテレスは
ぎゅうっと
あたしを抱き締めて

あたしも
彼の背中に
手を回して

二人の唇は
また繋がって

キラキラ瞬く
メリーゴーランドの光が

あたし達を
包み込んでた

アリストテレスは

キスの合間に
囁いたの

『好きだよ…』って

だから
あたしも
答えたの

『私もよ…』って

温もりが

甘くて

あたしは
夢見心地で

深い夜の闇が
やさしくて…

嬉しかったの

あたしは

もう

一人じゃないから…

夜の夢

本当に
これは現実なのかしら

アリストテレスが
あたしを

抱き締めてくれている

『本当に、
あたしでいいの？

あたしは、
亡くなった奥さんには
なれないから…』

でも

アリストテレスは

静かにあたしを見た

『僕が好きなのは
君だから』

って…

『僕には子供がいる
それでも
君への想いは
我慢できない』

アリストテレスの
言葉に

あたしは泣いた

この
ガラスの都会で

あたしを
想ってくれる
人がいたことに

あたしが零した涙を
アリストテレスが拭う

幸せに

身を任せて

あたし達は
夜の闇に溶け込んだ…

今夜は家には
帰らない

ずっと
アリストテレスの
温もりを離さない

遊園地の近くの
お洒落なホテルに入って

あたし達は
温もりを伝えあった

アリストテレスは
真剣な顔で

甘い優しい眼差しで

あたしをふんわり
抱き締める

彼のまごころを知って

あたしは
涙がとまらなかった

あなたが去ってから

淋しくて
たまらなかったから

彼の気持ちに
本当に
感謝した

彼と一つになった瞬間

あたしの中から

あなたは消えた

あたしに見えているのは

アリストテレスの

優しい瞳

ただそれだけ

夜の闇は

あたたかくて

夢みたいに

過ぎてゆく…。

別れ

あの夜のことは
きっと永遠に忘れない…

――――その思いが
私のまごころを変えた
私はもう
待つだけの少女じゃいられなかった
自分の居場所を見つけられたから

あなたが私を訪ねてきた
その日…

＊

あなたがやってきたのは

遊園地に行った１０日後だった
どうして今更戻ってきたのか
私にはどうしてもわからなかった

だけど
あなたは嬉しそうだった

ベランダに残された
小さなパセリの苗を見たから

私の心が
まだあなたに向いていることを知ったから

でも
私は苦しくてたまらなかった

どうして戻ってきたの？

そんな思いに突き上げられた

少し前までは
あなたに戻ってほしくて　たまらなかったのに

私は薄情だった

そして
あなたも薄情だった

お互い

自分の都合で心を揺らしあっていた

私は気が気じゃなかった

いつアリストテレスがやってくるかわからないのに

あなたが私の部屋にいることが知れたら

きっと彼はショックを受けるから

私はパセリの幼い葉を摘んだ
ぽろぽろ泣きながら摘んだ

そして
呆然としているあなたに
最後の贈り物をした

あなたの大好物

パセリの効いた
ジェノベーゼを…

あなたは少し笑って
それを食べてくれた

おいしいよ、って言ってくれた

私は何も言えずに
立ち尽くすばかりだった

あなたが手を振って
部屋を出ていく

その後ろ姿を

泣きながら見送った…

無惨な
パセリの苗と共に。

別れ（後書き）

恋は
始まりながら
終わってゆく

今日も
誰かのベランダで
パセリが見つめている

小さな作品ですが、読んで下さった皆様に感謝しております。本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6522j/

パセリの気持ち。

2010年10月9日09時13分発行